

福山市立女短大 加納 三千子

目的：手指先の使用は脳の発育促進や老化防止、障害者の教育や治療などに大切な役割を果たしていることが報告されている。しかし、近年我々の生活のすみずみにまで機械化、簡便化が進み、体や手を使う作業範囲が次第にせばまるとともに、不器用な若者が増えてきている。このような状況下では、遊びと同様に家事作業も手指の巧緻性の発達などに果たす役割が大きいものと考えられる。そこで本報では、家事労働や食事マナーと手の巧緻性とのかかわりを明らかにするため調査を行った。

方法：①調査対象者…福山市立M中学校2年生及び福山市立女子短大学生を対象とし、回答不備なものを除き、中学生175件、短大生175件を分析に用いた。②調査場所…被験者の教室；③調査方法…(a)質問紙法…食事マナーの規範意識、態度及び食事に関する家事の手伝い開始時期、最近の手伝いの頻度について質問した。(b)観察法…質問紙調査の後、コップに水を注ぐ動作、10個の豆を割箸を用いて別の皿に移す動作をさせ観察した。

結果：1. 手の巧緻性は、中学生、短大生ともに箸や茶碗の持ち方などおもに和食の規範意識との関連がみられた。2. 中学生では、手の巧緻性と現在の手伝いの頻度との関連がみられた。3. 短大生では、手の巧緻性と手伝いの開始時期との関わりがみられた。4. 中学生では左手を添えるものほど、和、洋食器の取扱に関する規範意識が高く、手伝いの開始時期が早かった。5. 短大生では、左手の動きと規範意識との関連はみられなかった。しかし、早くから手伝いを開始するものほど、また手伝う頻度の高いものほど、作業時に左手が動いていた。